連載・自衛隊の実態その⑥

兵士の戦闘とは

十月末、三年ぶりの観艦式が相模湾で行なわれ、見学者の「だれかがやらなければならないことだから、自衛隊にがんばってもらいたい」という発言がテレビから流れていた。

「北」の核実験が「新世紀の日米同盟」の緊密化をますます加速させる「大義名分」となっている。それは自衛隊の変革・再編の速度を増すことで、国土防衛から海外派遣・集団的自衛権獲得を最優先する軍事政策に他ならない。

軍事優先一色のような昨今、がんばることを要求されている「自衛官」一人ひとりに何が起こっているのか気にとめるものはいるのだろうか。

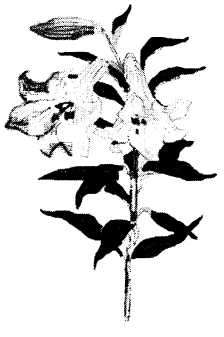
陸自の制服組幹部が研究論文を発表する部内雑誌『陸戦研究』の二〇〇六年三月号に陸自一佐（大佐）の「今、第一線で起こっていること―ストレスフルな戦場」という小論文があるという。

「冷戦の一九七〇～八〇年代、部隊で鍛えられた私の経験では、当時の十年分の変化が今の月単位に相当するように感じている」「冷戦時代は北海道で『対着上陸作戦対処一本』の訓練であったが、今は多様な役割に対応しなければならなくなった。その内容は『市街地や森林錯雑地で戦う事態を考えなければならない』し、この市街地での作戦が普通科の隊員たちに大きな影響を及ぼしている。」

そして「普通科・歩兵の行動への具体的影響として、第一の市街地戦闘での訓練環境、すなわち、入り組んだ建物内部での戦闘行為のため、数名で密着した隊形、全周に対する射撃できる態勢、友軍相撃を避けるための厳しいガンハンドリング（銃操作）が要求されるという。また、狭い室内での行動のため『左右両方での照準』操作も必要とされる。」

「第二に従来の訓練では、歩兵戦の交戦距離は三〇〇メートル前後であったが、市街戦、特に建物内部の戦闘では、これが数メートル～十メートル前後となり、『敵の顔が見えて撃つことは大きな精神的ストレス』であり、この距離での射撃では、『ある種の冷徹さ、残忍性が必要』という。そしてこの交戦距離は、第三に敵よりも早く撃つという射撃のスピードが要求される一方、接近戦での戦闘は、小銃弾（五・五六ミリ）が人体を貫通し直ちに即死しないので、反撃を封じるためのトドメの射撃が要求されるという。第四に住民が混在する市街地では、むやみに射撃できないというストレスが生じるという。」そして「この最近の陸自の市街地戦闘の強化が『精神的心理的に隊員に負担』をかけ、『異常な戦場心理状態』を生みやすくしている。」以上は小論文を紹介している小西誠著『自衛隊そのトランスフォーメーション』（社会批評社、二〇〇六年七月）からの引用である。

上記の内容は陸自だけにかぎられたことではなく、今注目されている海自による船舶検査でも想定される。

「自衛隊にがんばってもらうこと」とは、敵を確実に排除する「冷徹で残忍な」殺人マシーンをつくりあげることである。「だれかがやらねばならないこと」とは自衛隊だけに任せて済むのではない。「国民保護」の名のもと私たちも自衛隊に積極的な後方支援を行ない、敵愾心を煽り軍事優先の道を進むことを認める「異常な戦場心理状態」を持つことになる。

（T）